

2020/12/06

ヨハネの福音書 講解メッセージ②7

『なぜわたしを信じないのですか』ヨハネ 8:45-59

✠ なぜ信じることができないのか

「しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。」(ヨハネ 8:45-46)

イエス様は、「なぜわたしを信じないのですか」と問いました。「信じる」とは、閉じこもっていた自分の殻から飛躍すること、自分の物差しで納得しようとするをやめてそのまま受け入れることです。それができない理由は、何なのでしょう。

1. 「信じる」とは納得することだと思っているから

納得することの主役は理性です。理性は証拠を求めます。信じること的主役は信仰です。そして、神の言葉は、信仰でしか受け取ることができません。なぜなら、私たちの時間と空間という概念では、神を把握することはできないからです。

人間は無限に続く直線を把握することはできず、その一部を知ることしかできません。同様に、永遠なる神の一部を知ることではできても、理性によって神を把握することはできないのです。また、私たちは現象には必ず原因がある因果律の世界で生きていますから、神についても原因を追究しますが、神に原因はありません。

2. 知性で神を知ることはできないから

箱の中身を外見だけで知ることはできません。中身を知るいちばん簡単な方法は、それを知っている人に聞くことです。同様に、神の国のことは神の国を知っている方に聞くしかないのです。

また、自分の知らない言語を話す人と会話をする場合、通訳者を介さなければなりません。そして、その通訳者がきちんと通訳してくれていると信じるしかないのです。イエス・キリストは、神の国のことを私たちにわかる言葉で通訳してくださった通訳者です。私たちは通訳者を信じるしかないのですが、自分の限界を知らずに自分で理解できると思いきこんでいるため、信じることができないのです。

3. 自分の弱さを承認できないから

もし海で溺れているときにロープが投げられたら、必死になってつかもうとすることでしょう。その時、「このロープは丈夫かなあ」などと考えて、結論を出してからつかもうとする人はいません。私たちが神を信じることができないのは、自分の状況がわかっていないから

です。聖書が教えている私たちの状況は死人です。投げられるロープをつかまなければ生きることができないのに、それがわかっていないために、私たちは神の助けを受け取ろうとしないのです。

✕ どうしたら信じることができるか

信じられるようになるために、聖書は二つの方法を教えています。

1. 自分と向き合う

私たちは、いつも何か楽しいことを探して、自分と向き合うことから逃げようとしています。相談の中でいちばん多いのが人間関係の悩みです。相談に来る人はたいてい相手に問題があるから苦しいのだと思っているのですが、その悩みの本当の原因は、相手を受けないということです。しかし、多くの人はそのことに気づきません。

きちんと自分と向き合い、自分の内側を見るなら、誰でも自分の弱さに気づきます。ところが、気がついて、人はそれを自分ではどうすることもできません。その時、「神に頼るしかない」と、信仰が主役になります。自分と向き合おうとしなければ、その世界は封印されます。自分をごまかし、楽しいことだけに目を向けようとする生き方をやめない限り、自分の弱さや不安を解決することはできません。

そこで神様が用意してくれたのは、律法です。律法は私たちをキリストに導くための養育係であると聖書は教えます。その中でも最高の律法は「あなたの隣人を愛せよ」というものです。この律法に従える人はいません。できない自分にぶつかった時こそ、自分と向き合うチャンスです。自分を大切にってしまう、人と比較してしまう、神を愛するといいながら兄弟を受けない、……そのような自分が見えたら、自分の弱さが承認できるようになるチャンスです。『わたしは弱いものです。主よ、どうぞ助けてください。』と祈りましょう。

2. 被造物を通して神を知る

地球と月との間には、気の遠くなるような距離があります。そして、今、私たちが見ている星々は、それよりもさらに遠くにあります。宇宙には数え切れない星があり、その星同士が引力によって支えあい、地球が含まれる太陽系は銀河系の中の一部に過ぎず、銀河系以外にもさまざまな銀河が存在します。宇宙は広すぎて大きすぎて、私たちの想像をはるかに超えています。

このことから、私たちは、神がいるということを認めざるを得ません。そして、人間は自分の小ささ、弱さを知り、神は人よりも偉大なこと、神の思いは計り知れないことを知るので、すると、私たちは自分を飛躍することができるようになります。

✠ 神から出た者は神のことばに聞き従います

「神から出た者は、神のことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」ユダヤ人たちは答えて、イエスに言った。「私たちが、あなたはサマリヤ人で、悪霊につかれていると言うのは当然ではありませんか。」(ヨハネ 8:47-48)

「神から出た者」とは、救われた人のことです。「神のことばに聞き従う」とは、神の命令を実行できるようになるという意味ではなく、神のことばを信じようとする、という意味です。救われた人は、神のことばを信じる戦いをするようになるのです。

しかし、この言葉を聞いたユダヤ人たちは、それを理解することができず、イエス様を攻撃し始めました。自分に理解できないことを言う相手を攻撃するのは、今も昔も変わりません。

ここで、ユダヤ人たちは「悪霊」と言っていますが、悪魔の起源がわからないのと同様に、悪霊の起源も聖書には記されていません。墮落した御使いだという人もいますが、聖書が明確に教えていることは何ともありません。はっきりしていることは、死んだ人の霊ではないということくらいです。私たちにできることは、聖書に書かれていることを信じることです。聖書に書いていないことを推測で論じても意味がありません。

「イエスは答えられた。「わたしは悪霊につかかれてはいません。わたしは父を敬っています。しかしあなたがたは、わたしを卑しめています。しかし、わたしはわたしの栄誉を求めません。それをお求めになり、さばきをなさる方がおられます。まことに、まことに、あなたがたに告げます。だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」(ヨハネ 8:49-51)

イエス様が、「まことに、まことに」と言われるときは、大変重要な話だからよく聞きなさい」という意味です。ここでイエス様が伝えたいことは、「わたしのことばを守る人は決して死を見ることはない。」ということです。

同じことが、ヨハネ 5:25 でも語られています。「まことにまことにあなたがたに告げます。死人が神の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」これは、ヨハネの福音書の最も重要な部分です。「聞く者」とは「神のことばを守る者」という意味です。それは神のことばを信じようとする者であり、神のことばに応答する者です。神が引き寄せるのでなければ、誰も神のもとに行くことはできません。

「死人が神の声を聞く」とありますが、私たちの魂は神のいのちによって造られ、人の意識は、見える世界を認識する顕在意識と、霊的な世界を認識する潜在意識とに分かれます。私たちが神の声を聞くのは潜在意識です。その声に応答して、神の御手をつかむと、どうなるのでしょうか。

私たち人間は、精神（意識）という存在です。神のいのちという普遍的な運動にこの世の情報がぶつかることによって生じた精神（意識）が私たちです。つまり、私たちが生きるには二つの条件、魂と体が必要なのです。この二つがなければ、人は生きることができません。私たちの体が死ぬとき、情報が入らなくなった魂には意識が生じなくなります。こうして人は死に、この世での働きが終わった魂は神に返却されます。私たちが滅びない者になるには、今生きている間に朽ちない体を着せてもらう必要があるのです。そうすると私たちは肉体が滅んでも、死を見ることなく、自動的に朽ちないからだに移ることができるのです。これが永遠のいのちを持つということです。

神の呼びかけに応答する者は、永遠のいのちを着せられていて、その者は死からいのちに移されているのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ 5:24）

私たちの肉の体が持ち込める情報は、神の見えないこの世界の情報だけなので、神を知ることにはできません。しかし、霊のからだは神の国に属する体ですから、その霊のからだを着せられると、神の国の情報を知ることができるようになり、イエス・キリストを信じられるようになるのです。ですから、イエス様はわたしを信じる者は永遠のいのちを持っているのだと言われました。それが、「だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を見ることはありません。」（ヨハネ 8:51）ということです。

✠ ユダヤ人の怒り

「ユダヤ人たちはイエスに言った。「あなたが悪霊につかれていることが、今こそわかりました。アブラハムは死に、預言者たちも死にました。しかし、あなたは、『だれでもわたしのことばを守るならば、その人は決して死を味わうことがない』と言うのです。あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」」（ヨハネ 8:52-53）

実際にアブラハムは死んでいるのに、「死なない」とはいったいどういうことなのか、ユダヤ人たちは腹を立てました。この世の物差しで考えれば、当然の態度と言えます。

しかし、神の言葉にこの世の物差しは通用しません。人は、この世の行いと神の国とを関連付けて考えますが、神の国は因果関係にはなく、絶対的なものです。神の目には、私たちは絶対的な価値を持ったもので普遍性のものです。

「イエスは答えられた。「わたしがもし自分自身に栄光を帰するなら、わたしの栄光はむなしいものです。わたしに栄光を与える方は、わたしの父です。この方のことを、あなたがたは『私たちの神である』と言っています。けれどもあなたがたはこの方を知ってはいません。しかし、わたしは知っています。もしわたしがこの方を知らないと言うなら、わたしはあなたがたと同様に偽り者となるでしょう。しかし、わたしはこの方を知っており、そのみことばを守っています。あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」

そこで、ユダヤ人たちはイエスに向かって言った。「あなたはまだ五十歳になっていないのにアブラハムを見たのですか。」

イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」すると彼らは石を取ってイエスに投げつけようとした。しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれた。」

(ヨハネ 8:54-59)

ユダヤ人が父なる神を「私たちの神」と呼ぶのは正しいことです。しかし、彼らは神のことを何も知らないとイエス様は言われます。それは、人の理性で神を知ることはできないからです。

ユダヤ人たちは、イエス様のことばがさっぱり理解できず、イエス様を攻撃し続けましたが、イエス様が「アブラハムが生まれる前から、わたしはいる」と言ったことについては激怒しました。なぜなら「わたしはいる」とは「存在するもの」という意味で、神にしか使ってはいけない言葉だったからです。つまり、イエス様は、ご自分が神であると語られたのです。これを聞いたユダヤ人たちは、怒りを爆発させ、イエス様を殺そうとしました。

このことから、私たちは怒りの原因を知ることができます。私たちは、自分の物差しで相手を理解しようとし、その物差しに当てはまらないと怒るのです。つまり、怒りとは自分の物差しの限界を示すものであって、相手の問題ではありません。自分が相手を受け入れられないということです。ですから、怒りの解決とは、相手を変えるのではなく、あなたが物差しを変えること、あなたが自分から飛び出して器を大きくすることです。これができるかできないかで人生が変わります。自分の物差しにとどまり続けるなら、あなたには敵が増える一方です。自由になるためには、そこから出て物差しを壊さなければなりません。それが飛躍です。ユダヤ人たちはそれをしなかったために、最終的にイエス様を殺そうということになってしまいました。

✠ 信仰による喜び

「あなたがたの父アブラハムは、わたしの日を見ることを思って大いに喜びました。彼はそれを見て、喜んだのです。」(ヨハネ 8:56)

パウロはこのことを次のように解説しました。

「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。」（ヘブル 11:13）

「約束のものを手にしたからではなく、信仰によって喜ぶ」、この生き方が、私たちの求める答えです。人間は、理性で神に到達しようとしたが、できませんでした。しかし、信仰でなら、できるのです。

人は生まれながらに神を求めています。それは、私たちは神のいのちによって造られ、私たちの土台に神がおられるからです。ただし、悪魔がもたらした死によって神が見えなくなったため、神を求める運動は、統一を求める運動になりました。私たちの理性は、類似するものを捜し、因果律によって結びつけようとし、すべてにおいて統一を求めています。それは、私たちの土台である神が統一運動を展開しているからです。

三位一体の神は、互いに受け入れあって、統一しています。そして、神のいのちで造られた私たちを統一しようとしています。私たちはそのいのちに支えられていますから、やはり統一を目指します。これを愛といいます。

愛とは互いに結びつこうとする統一運動です。この運動のおかげで世界に平和を見ることができるようです。しかし、この地上では、すべてのものは条件をつけられているので、統一が完成することはありません。私たちが目指している統一を完成できるのは、条件をつけられていない神だけです。その方につながり、その方が支えにならない限り、私たちの心が安らぐことはありません。人は神を求め、神の始まりをたどりましたが、始まりである神は無限であり、始まりがないという二律背反の結論に行き着きました。人の理性では、どうにも答えを出せません。神と私たちを結ぶことができるものは、信仰しかないのです。人間の力では約束のものを見ることはなかったけれど、信仰の人々はそれを見ることができました。信仰だけが、そのゴールに到達し、神と私たちを結びつけてくれる橋になるのです。これが、イエス様が繰り返し言われたことです。

私たちは2000年前のイエス様の十字架を見ることはできません。しかし、信仰でそれを見て、愛されている自分を信じることができます。だから、義人は信仰によって生きると言われているのです。

私たちがすべきことは、神の言葉をどこまで信じることができるか、どこまで神を信頼し、信仰で神に近づこうとするのかです。これが罪との戦いです。罪との戦いとは、道徳ではありません。不信仰との戦いです。神は脱出の道を用意し、必ずあなたを助け出すと約束しておられますから、問題にぶつかったら、あきらめることなく、信じて祈り、神の解決を見ましょう。